

ランスロットにおける忠誠心の問題

——聖杯探求を中心に——

白井 英充子

多くの騎士たちが恋に、冒険にと華麗に活躍する『アーサー王の死』(*Le Morte Darthur*)の中で、マロリー (Sir Thomas Malory) は理想の騎士像というものを次ぎのように唱えている。

...neverto do outerage nothir mourthir, and allwayes to fle treson, and to gyff mercy unto hym that askith mercy, uppon payne forfiture worship and lordship of kinge Arthure for evirmore; and allwayes to do ladyes, damesels, jantilwomen and wydowes strengthe hem in hir rightes, and never to enforce them uppon payne of deth. Also, that no man take no batayles in a wrongefull quarell for no love ne for no worldis goodis. (120. 17~24)¹

このマロリーの騎士道精神の理想からは、名誉、武勲、寛大さ、慈悲深さ、正義、礼節、等という特質を挙げることができる。騎士達はこれらの美德を常に神、主君、恋人という三者に対して捧げることを要求される。つまり忠誠心である。三つの忠誠心はそれぞれ騎士の心の中において互いの領域を侵犯せず、調和のとれた共存関係であることが望ましいのはもちろんである。しかし、現実には難しい。この忠誠心の問題に最も心を悩ませたのは「騎士道の華」(*the floure of knyghthode*) (791. 27) という褒め言葉で語られるランスロット (Lancelot) であろう。ランスロットは主君アーサー (Arthur) 王率いる円卓の騎士集団の中で第一席を占めているが、主君の妃グィネヴィア (Guinevere) を愛

することでアーサー王とは対立する関係になる。同時に、神への忠誠心も純潔の問題で不完全であることが、聖杯探求で明らかにされる。このようにランスロットにおける忠誠心の問題とは、「神」対「恋人」そして「主君」対「恋人」という二つの対立する図式からくるものである。また、「神」対「主君」においては、天上の王である神の正義を地上で実際に執り行なうのが地上の王の主君であるという関係から、二者は同一とみなされ、その間には忠誠心の対立は起きないとみなされるのである。²

ランスロットが忠誠心の問題を自ら認識し、その解決を計ろうとしたのは、この聖杯探求の時が初めてであった。彼の息子ガラハッド

(Galahad)がアーサー王の宮廷へ現われ、父ランスロットに自分を騎士にしてくれるように頼む。この時点では、ランスロットが世界最高の騎士であった。だが、それもガラハッドが、ただ一人、いとも簡単に石から剣を抜いたことによって、ランスロットはガラハッドにその地位を譲り渡してしまう。このガラハッドの、バーリン (Balin) の剣の冒険の成功はガラハッドが聖杯探求の勝利者であって、神の恩寵を受けた最高の騎士であるということの予見であり、しかも、ランスロットに “I know well I was never none of the beste.” (863. 28-29) と言わせるのに十分であった。そこで、この聖杯探求の冒険におけるランスロットの、罪の悔俊の過程の中に、ランスロットの対立する忠誠心の問題がどの様に展開していき、聖杯探求の終了後、ランスロットはこの問題についてどの様な結論を見たのか、或いは、見なかったのかを考察してみたいと思う。

聖杯探求の成功の条件は、初めに、僧服の老騎士によって、「婦女子は伴わぬこと。罪深き者はイエス・キリストの神秘を眼にすることができないのだから。」(868. 15-869. 4) と明らかにされる。純潔が絶対条件なのである。聖杯探求の冒険に赴く騎士たちの中でその

目的地に到達し得た者は、初めから、聖杯騎士として運命づけられているガラハッド、そして、パーシヴァル (Percival) とボルス (Bors) の三人である。ガラハッドの父ランスロットは王妃グィネヴィアへの愛のためにその仲間には入れない。"I know well I was never none of the beste" と、自分が最高の騎士の地位から脱落したことを悟り、落胆するランスロットに対して白馬に乗った或る一人の貴婦人は、"Yes, ... that were ye, and ar yet, of ony sinfull man of the worlde."

(863. 30-31) という慰めとも励ましともつかぬ言葉をかける。今や、純潔でないランスロットは罪深き人間であって、ガラハッドと異なり世俗の世界に身を置いている。だが、彼はその様な世俗の世界の騎士の中においてならば最高の位置を占めることを許されるという。この貴婦人の言葉について、イール (S. N. Ihle) は、マロリーがランスロットを聖杯探求の達成に、より近付けさせるために行ったことだとしている。³ 純潔の点において、ランスロットに罪があることは紛れもない事実である。しかし、それではランスロットにとって最初から聖杯探求の成功などおぼつかない。そこで、マロリーは「世俗の世界では最高の騎士」の席にランスロットを付かせることにより、しょく罪の如何によっては聖杯の騎士たちの仲間入りの可能性を示唆したものだと思われる。そして、その可能性はランスロットとガラハッドの父と息子という関係からも当然強められるのである。

ランスロットの聖杯探求は彼の罪の告白から始まり、悔俊の繰り返しで終わる。その第一回目は、ある古い教会で病に苦しむ騎士が聖杯によって治癒されるという聖杯の神秘をランスロットが目撃したことによる。その騎士の病の原因とは、"he dwellith in som dedly synne whereof he was never confessed" (895. 10-11) であって、現在のランスロットの姿そのものを表している。聖杯の神秘を眼の当たりにしながらも、ランスロットはグィネヴィアへの愛の罪を背負っているため起き上がって聖杯へ近付こうという勇氣も起きない。そして、その愛は既に彼の心の中では "olde synne" (896. 8) とみなされ、
"I was the moste wrecch of the worlde" (896. 26) と自らの

身を嘆くものとなっていたのであるが、或る隠遁者はランスロットに対して更に神への祈りを説くのである。

...for He hath yeven you beauté, bownté semelynes, and grete strengthe over all other knyghtes. And therefore ye ar the more beholdyn unto God than any other man to love Hym and drede Hym, for youre strengthe and your manhode woll litill avayle you and God be agaynste you.

(897. 2-7)

ランスロットは生まれつき偉大な才能、すなわち「天の美德」(heavenly virtue) というものを神から授けられているが、その尊さも意味も知らずにいるため「天の美德」を単なる「騎士道の美德」(knightly-virtue) と履き違えてしまっている。ムーアマン (C. Moorman) はこの点について、ランスロットは「気高い騎士道の美德」(high knightly virtue) を持つ騎士ではあるが、「天の美德」が持つ“spiritual”な意味での騎士ではないとし、「天の美德」と「騎士道の美德」の相違をランスロットは頭の中では理解していたが、その理解の基に行動することは出来なかったのだとしている。⁴ このことは、聖杯探求の冒険を通して繰り返される悔俊によっても明白なものとなっていく。さらに、隠遁者はランスロットに彼の、“olde synne”について、その罪の罪状を明らかにすることを促している。

...all my grete dedis of armys that I have done for the moste party was for the quenys sake, and for hir sake wolde I do batayle were hit ryght other wronge. And never dud I batayle all only for Goddis sake, but for to wynne worship and to cause me the bettir to be beloved, and litill or nought I thanked never God of hit. (897. 17-22)

最初に、王妃グィネヴィアがランスロットにかけた愛とは、“grete favoure” (253. 16) なものであった。それはランスロットが騎士の中で最高の名誉を持っていたため、彼からならばグィネヴィアは最高の忠誠心を得られるからである。一方、ランスロットにとっても、“I am trew knyght” (259. 12-13) と断言しているように、騎士として、第一に“for drede of God” (270. 33-34) に生きることが最高の名誉を得ることに繋がり、それ故、王妃グィネヴィアに相応しい“vertuose lover”⁵ になれると信じていたのである。二人の愛とは、言わば友愛⁶ と呼ばれるものであり、ランスロットは主君アーサー王に捧げる愛と同じレベルの愛を王妃グィネヴィアにも捧げていたのである。しかし、そのような愛も長くは続かず“grete favoure”の範囲を越え、今や、“oute of mesure” (897. 16) と呼ばれるものに変化して行き、ついには戦いが正しいものであらうとなかろうとグィネヴィアのためであったら、全ての戦いに喜んで身を投じるという事態になってしまっていた。このような愛を先の隠遁者は、

“...sir Launcelot, whan the Holy Grayle was brought before the, He founde in the no fruyte, nother good thought nother good wylle, and defouled with lechory.” (898. 32-35) と、明らかなこととした。

第二のしょく罪で、ランスロットはある教会で僧から聖杯を目にする力はないといわれ聖杯探求の間は聖者の苦行服 (hair shirt)⁷ を身に付け、酒や肉の欲を断ち、ミサを日課にするようにという具体的な忠告を受ける。これを実行に移したランスロットは貴婦人から以前よりは聖杯に近付いたことを知らされる。だが、これもランスロットの夢の中に出てきた老人の言葉によって確実なものでないことがわかるのである。

I have loste all that I have besette in the, for thou hast ruled the ayenste me as a warryoure and used wronge warris with vaneglorie for the pleasure of the worlde more than to please me. (928. 34-929. 1)

ランスロットは神に対して忠誠心がなく、神の意志に反して“vane-glory”に行動していると警告される。彼の心の中では天の美德と騎士道
の美德が混同したまま理解していると知らされるのである。

さらに、ランスロットはこの夢から覚めたとき聖杯で治癒された騎士
に出くわし、彼に奪われた剣、武具、馬を“thou deddist me grete
unkyndnes”(929. 9)と、戦いで倒して取り戻す。このことは、苦
行服という神から与えられたものをランスロット自らが手放して、以前
の罪深い生活に逆戻りするという意味で極めて象徴的な出来事である。
ランスロットのこのような誤った信仰心は、次ぎの白騎士と黒騎士の戦
いで一層明らかなものとなる。

ランスロットは夢の中で黒騎士が白騎士に負けているのを見ると、
騎士道精神から劣勢の黒騎士のほうへ味方する。だが、彼の驚くべき働
き振りにもかかわらず黒騎士側は戦いに敗れ、ランスロットはここで初
めて負けというものを知る。その原因は、彼が味方した黒騎士側は、
“erthely knyghtes”であって“the synnes whereof they be not
confessed”(933. 25-27)を代表しており、それに対して白
騎士側は“good knyghtes”で“virginité”と“chastité”(933.
27-28)を代表していたからであった。ランスロットの敗北は、彼
が神から騎士として偉大な能力を与えられ使い方次第では天の美德とな
り得るにもかかわらず、“vayneglory”のためにその能力を発揮できな
いということ、そして、彼には物事の本質を見抜こうという賢明さと慎
重さに欠け、戦いに臨む勇氣は大きいものであるが、その行動は無謀で
軽率なものであると言う事を示している。ランスロットの罪の告白と悔
俊の繰り返しは、このような彼の性格上の欠陥に由来するものと考えら
れる。

この戦いの後、ランスロットは幾許かの完全な悔俊を行ったことが
わかる。以前にされた忠告に従い、毎日の神への感謝と祈りを忘れずに、
確かに、“he was susteyned with the grace of the Holy Goste”

(1011. 30)という状態であった。それ故、ランスロットは夢の
中で息子で、聖杯騎士であるガラハッドとの再会が許されるのである。

ガラハッドは聖杯に最も近い人間であり、彼に会えるということはランスロットも以前よりは聖杯に近い距離にいることがわかる。マロリーはガラハッドにランスロットのことを“ye were the begynner of me in thys worlde” (1012. 14-15)と言わせている。ランスロットの罪深い現在の状態をガラハッドが知らないはずはなく、父に対するガラハッドの変わらぬ尊敬と愛情は、ランスロットを「世俗の世界の騎士の中では最高」としたマロリーの意図でもわかるように、決してランスロットを救い用のない「罪深い者たちの中では最低」としていなく、常にランスロットに救いの機会を与え、しかも、世界最高の騎士であるガラハッドの賛辞によってランスロットの負の部分のイメージを弱らせ、出来るだけ立派な騎士であるとその価値を高めるのに大いに役立っているのである。このことでランスロットのしょく罪が最終段階にはいったことを示している。

ランスロットは、“thou shalte see a grete parte of thy desyr” (1014. 14-15)と言う或声のもとに聖杯探求の成功を暗示される。だが、また、昔の罪を繰り返してしまう。聖杯が置かれている城の門の番をするライオンに剣を抜くのである。これは先の白騎士と黒騎士の戦いで行ったのと同じ失敗を繰り返してしまったことであり、ランスロットが現在いる世俗の世界からガラハッドのいる天の美德に満ちた世界へ昇ることがいかに難しいかがわかる。それ故、ランスロットは次ぎのように聖杯へ近付くのを拒否されるのである。“...flee and entir nat, for thou ought nat to do hit! For and if thou entir thou shalt forthynke hit.(11015. 20-22) しかし、ランスロットはこの神の意志を無視するや否や、又しても聖杯を目の前にして体を動かす力をなくしてしまうのである。そして、そのまま24日間、眠り込んでしまう。この24日間の眠りとは彼の今までの24年間の罪のしょく罪であった。

ランスロットの聖杯探求の冒険は、以上見てきたように、聖杯を目にしながらも失敗に終わってしまう。彼は何度となく、しょく罪の機会を与えられていながら最後によりやく自分の今までの24年間の罪をあ

がなうことができたが、息子ガラハッドのように聖杯騎士にはなれなかった。聖杯探求の成功の条件とは、まず最初に純潔であることであった。純潔でないとするならば、その罪を悔い改めなければならない。しかし、ランスロットは、なかなか神の意志に添うよう悔俊することができなく、かえって新たに罪を重ねてしまう結果となった。聖杯騎士のパーシヴァル（Percival）が悪魔の化身である美しい女性の誘惑を受けながらも、騎士道の掟と僧との約束を思い出し十字を切ったため、神のご加護によって誘惑を逃れ純潔を守り得たのとは反対に、ランスロットは自分の持つ信仰と信念に対して自信が持てなく、毅然とした姿勢を取ることができない。それ故、悔俊を繰り返してしまうのであるが、聖杯探求を通してのランスロットの最大の罪とは、ガラハッドが父ランスロットに伝えた最後の言葉、“to remembir of thys unsyker worlde”（1036. 28）にみられるように、彼の移り変わりやすい性格、そして、神に対する不服従にあったと言えるであろう。

聖杯探求の冒険が終了し、生き残った騎士たちは宮廷へ戻り喜びのもとに迎え入れられた。ランスロットも大歓迎の中の帰環であり、彼には聖杯探求の冒険の物語を語るという重要な役割が与えられていた。ランスロットの聖杯探求における失敗は明らかなことであるにもかかわらず、宮廷の人々は何もそれについて口にしないし、だれも関心をもたない。ガラハッドを始めとした神の恩寵を受け天上の世界に住むべき者たちは、既に、神のもとへと旅立ち、宮廷に残るは世俗の世界に住む者たちのみである。その中心に「世俗の世界の最高の騎士」としてランスロットがいる。同じ世界の側にいる者たちからはランスロットの忠誠心の問題は既に解決されたと思われる。何故なら、聖杯の獲得には失敗したが全くの失敗ではなく、聖杯を目にすることは出来たからである。

また、主君アーサー王も現在のランスロットに満足し、それ以上のものを求めようとはしない。何故なら、アーサーは聖杯探求には初めか

ら賛成ではなかった。優れた多くの騎士たちが命を失い、自分の持つ円卓の騎士集団が失われてしまうからである。地上の王アーサーにとって、彼をその地位にとどめているものは何かというならば、それは地上最強の騎士集団を保持しているということであった。そのためにも、円卓の第一等騎士であるランスロットはいなくてはならない存在である。ランスロットの自分への忠誠心は、ランスロットが円卓の騎士集団の中で立派にその務めを果たしてくれる限り、問題とはならないのである。このような態度はアーサーが物語の中で一貫してとっているものである。

そして、天上の王である神は、たとえランスロットの悔俊が不完全であり何回となくそれを繰り返さなければならなかったにせよ、ランスロットの悔俊に対する姿勢には常に謙虚さがあり、真剣さがあつた。それ故、ランスロットの自分に対する忠誠心は、24日間の眠りでもって、ランスロットの今まで24年間のしょく罪となし、良しとした。それでは、ランスロット本人は自分の忠誠心の問題をどう考えていたのであろうか。

ランスロットとグィネヴィアの“oute of mesure”な愛は、ランスロットの聖杯探求における悔俊も虚しく、彼が宮廷に戻るとすぐに再開される。“thys unsyker worlde”に住む者の中で最も“unsyker”であるランスロットにとって、確かに聖杯探求を経て忠誠心の対立という問題に解答を見付け、一時は、神、主君、恋人という三者への忠誠心がそれぞれ協調し合う状態に置かれはした。しかし、それも、やはり

“unsyker”な状態から逃れることは出来ないのである。

三つの忠誠心をなんの問題もなく調和を保つことができた騎士として、ガレス(Gareth)の名を挙げることができる。⁸ 彼は「神」対「恋人」においては、その性的欲望を聖なる婚姻のなかで正当化し、「主君」対「恋人」においては、ランスロットのように遍歴の騎士とか軍の指揮官としてよりも、地方の有力者として、時折、宮廷に参内して王に仕えるということによって忠誠心の対立を解決したのである。しかし、ランスロットの場合は恋人グィネヴィアが主君の妃であること、また、冒険を求めることにより、多くの名誉を得ようとする騎士道の基本

からガレスと同じ選択をすることは出来ない。そのようなランスロットに対して、マロリーが一時的にせよ忠誠心の問題に解決を与えたということは、聖杯探求で最終的には不完全な悔俊であったとしても、それが謙虚で真剣な苦悩であったとすることによって、来るべき最期の悲劇の原因をつくったランスロットの責任を少しでも軽減させようとしているからであろう。マロリーにとってランスロットは罪深き人間、すなわち命あるものの中では最高の人間であるが、間違いなく全ての騎士たちのなかで最もお気に入りの騎士なのである。だからこそ、完全ではないが一時的にランスロットの忠誠心の問題に解決を与えたのである。

注

- (1) テキストの引用は以下全て Eugène Vinaver(e.d.), *The Works of Sir Thomas Malory* (Oxford: Clarendon Press, 1990) による。この騎士道精神の理想はマロリーの独創によるものである。
- (2) Beverly Kennedy, *Knighthood in the Morte Darthur* (Cambridge: D.S. Brewer, 1985), p. 99.
- (3) Sandra Ness Ihle, *Malory's Grail Quest* (Madison: University Wisconsin Press, 1983), p. 142.
- (4) Charles Moorman, *The Book of King Arthur* (University Kentucky Press, 1965), p. 195.
- (5) マロリーはこの “vertuouse love” を次ぎのように最も尊重していた。 “...first reserve the honour to God, and . . .

secundely thy quarell must com of thy lady. And such
love I calle vertuouse love." (1119.28-30)

- (6) Kennedy, p.111.

友愛 (the love of friendship) とは、イングランドにおいて
貴族が主君に "good lordship" を求めるのに対して、主君が貴
族に与える "love" のことをいい、中世では広く認められてい
た。

- (7) Ibid., pp.270-271.

"hair shirt" を着る意味は、自分の罪を忘れずにいるという
よりも、華やかな宮廷や栄光に溢れた社会の俗世界の価値観に
もう心を迷わせないために、それを着たという屈辱感を感じる
ことにある。

- (8) Ibid., p.146.

BIBLIOGRAPHY

TEXT

Vinaver, Eugène, ed., *The Works of Sir Thomas Malory* 3rd ed.
3 vols. Revised by P. J. C. Field. Oxford: Clarendon Press,
1990.

Criticism

四宮 満 『アーサー王の死——トマス・マロリーの作品構造と文体』

法政大学出版社、1990。

Barber, Richard. *The Knight and Chivalry* Ipswich: The Boydell Press, 1974.

Capellanus, Andreas. *The Art of Love* trans. John Jay Parry. New York: Columbia University Press, 1964.

Ihle, Sandra Ness. *Malory's Grail Quest*. Madison: University of Wisconsin Press, 1983.

Keen, Maurice. *Chivalry*. London: Yale University Press, 1984

Kennedy, Beverly. *Knighthood in the Morte Darthur* Cambridge: D. S. Brewer, 1985.

Kerrel, Peter. *An Arthurian Triangle* Leiden: E. J. Brill, 1984.

Loomis, Roger Sherman. *The Development of Arthurian Romance* London: Hutchinson University Library, 1963.

----ed., *Arthurian Literature in Middle Ages*. Oxford: Oxford University Press, 1969.

Lumiansky, R. M. *Malory's Originality* Baltimore: The John Hopkins Press, 1964.

McCarthy, Terence. *Reading the Morte Darthur*. Cambridge: D. S. Brewer, 1988.

Moorman, Charles. *The Book of King Arthur*. University of

Kentucky Press, 1965.

Schofield, William Henry. *Chivalry in English Literature;
Chaucer, Malory, Spenser, and Shakespeare* Cambridge:
Harvard University Press, 1964.

Whitaker, Muriel. *Arthur's Kingdom of Adventure* Cambridge:
D. S. Brewer, Barnes & Noble, 1984.

Vinaver, Eugène. *The Rise of Romance* Oxford: the Clarendon
Press, 1971.